

# 壮年期との比較からみる離島における高齢者の地域居住を支える生活環境

## ～愛知県佐久島を事例として～

井澤研究室（インテリア・プロダクト分野）A22AB074 鈴木有紗

### 1. 背景と目的

近年、人口減少と高齢化の進行に伴い、地方や離島において「住み慣れた地域で暮らし続ける」ことのできる生活環境の整備の重要性が高まっている。離島では医療・介護資源や移動手段などの生活基盤が限られるため、地域で暮らし続ける条件の把握が求められる。なかでも愛知県西尾市佐久島は、65歳以上の人口割合が<sup>1)</sup>57.2%を占める超高齢化地域であり、地域居住を可能とする条件を検討する対象として適している。さらにライフコースの視点から、高齢期の生活はそれ以前の暮らしの延長として形成される<sup>2)</sup>ことから、壮年期までに培われた生活が高齢期の地域居住に関係すると捉えられる。

本研究の目的は、佐久島の壮年期（40～64歳）と高齢期（65歳以上）住民を対象に、生活実態を把握して比較し、壮年期の暮らし方との連続性を踏まえて自立した地域居住を支える環境を明らかにすることである。

### 2. 研究の位置付け

離島・過疎地域の高齢者を対象とした先行研究には、介護福祉ニーズや居住継続意識など生活実態・支援体制、ならびに集落空間や滞留の場など生活環境の特徴を扱う研究<sup>3)4)</sup>がみられる。一方で、高齢期の暮らしをそれ以前の生活段階からの連続性として捉え、壮年期との比較を通して具体的に検討した研究は多くない。

本研究は、壮年期と高齢期の生活実態を共通項目で把握・整理し、生活の連続性と変化を明らかにすることで、地域居住を支える条件を具体的に示す点に特徴がある。

### 3. 研究方法と調査対象者

本研究では、40～90代の住民8名を対象とし、①暮らしに関するインタビュー、②住居および周辺環境の空間調査、③1週間の行動記録調査、④一週間の移動経路を記録するマッピング調査の4つを実施した。調査期間は2025年6月～10月である。対象者は、壮年期2名、高齢期6名で構成されており、このうち就労者は7名、非就労者は1名である（表1）。

インタビューでは生活歴や現在の暮らし、家族や島民との関係、仕事・生業、将来の暮らしへの意識などを聴取し、空間調査・行動記録・マッピングの結果と統合して、対象者ごとの生活像を総合的に分析した。

### 4. 生活の実態

外出回数は対象者によって幅があり、総外出回数および内訳には個人差がみられる（図1）。壮年期（a・b）では島内仕事と島内私用での外出回数が概ね同程度である一方、高齢期（c～h）では島内仕事が相対的に多い対象者がみられ、外出内訳の構成に世代による違いが表れている。対象者c・dでは島内仕事の割合が高く、反対に対象者gでは島内私用が中心となるなど、高齢期の中でも差がみられた。

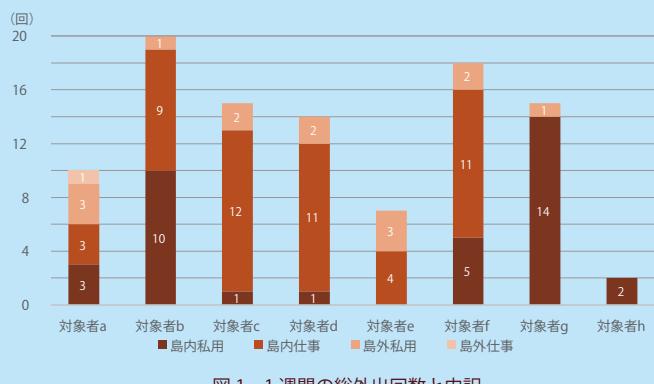


表1 対象者の属性

対象者	年代	性別	家族形態	就労状況	住居形態	居住年数
a	46歳壮年期	女性	夫婦	島内で就労	平屋	5年
b	46歳壮年期	女性	単身	自営業(飲食)	平屋(自宅兼店舗)	19年
c	68歳高齢期	男性	夫婦	自営業	平屋(旧民宿)	54年
d	69歳高齢期	男性	夫婦と子供	民宿・漁・畑	民宿(自宅併用)	50年
e	70歳高齢期	男性	夫婦	民宿・漁・畑	二階建て住宅	63年
f	73歳高齢期	女性	単身	島内で就労	平屋	53年
g	75歳高齢期	女性	単身	自営業(飲食)	平屋	23年
h	93歳高齢期	女性	単身	非就労	平屋(敷地内同居)	70年

立ち寄り場所の傾向から、日常の用務で訪れる場が交流のきっかけとなっていることが読み取れる（表2）。特に港は7名が利用しており、移動の待ち時間やすれ違いを通じて挨拶や情報交換が生じやすい。また、飲食店は食事目的での利用、学校はスポーツクラブ、委員会などの用事で訪れる機会が多く、人が集まりやすい拠点となっている。bおよびeは他の立ち寄り場所の利用が少ないものの、自身の店舗への住民の来訪を通じて会話や来客対応が日常的に生じ、交流の機会となっている。

表2 主な立ち寄り場所（島内）と対象者別の利用有無

立ち寄り場所	対象者a	対象者b	対象者c	対象者d	対象者e	対象者f	対象者g	対象者h
港	○	○	○	○	○	○	○	
JA	○		○	○		○		
郵便局	○		○					
しおさい学校	○	○	○	○		○		
開発センター	○							○
診療所			○	○			○	
飲食店	○		○	○		○	○	
友人宅・集会所	○		○	○	○	○	○	

図1 1週間の総外出回数と内訳

## 5. 自立した地域居住を支える生活環境

### 5-1 生活圏と移動手段

生活圏スコアは、1日ごとの外出範囲を外出なし0点、島内1箇所1点、島内2箇所2点、島外3点として1週間分を合計して算出した。壮年期は徒歩と車の利用が同程度であるのに対し、高齢期では車・バイクが主な移動手段であり、生活圏スコアは車・バイク利用の事例で高い傾向がみられる（図2）。漁業・農業・仕入れの際は荷物の運搬が生じるため、車が選択されやすいと考えられる。一方、90代の事例は外出が送迎による交流活動への参加に限られ、生活圏スコアが最も低かった。

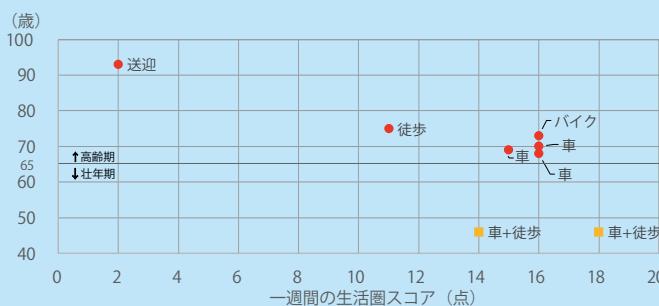


図2 一週間の生活圏スコアと主な移動手段

### 5-4 日常の緩やかな交流

行動範囲の重なりは港やJA、郵便局、学校周辺に集中しており、動線が交差する拠点で日常的な接触や情報交換が生じやすいことが分かる（図3）。互いの生活リズムや近況を把握する機会となり得るため、緩やかな見守りの基盤になっていると考えられる。また、ランニング、古墳の整備・漁など中心地から離れた場所へ向かう事例（図3）もみられ、役割や習慣が行動範囲を拡張する要因になっていた。友人交流が少ない事例でも地域活動やサービス、仕事に伴う接点（図4）から、緩やかな交流が成立していると考えられる。



図4 対象者別の交流時間（一週間合計）

## 6.まとめ

対象者の生活実態として、壮年期では島内仕事・私用の外出が同程度、高齢期では島内仕事が多い傾向がみられた。日常のすれ違いや待ち時間が交流の機会となっており、立ち寄りが少ない事例でも住民の来訪により日常的な交流が生じていた。

以上を踏まえると、佐久島の高齢者の地域居住を支える生活環境は以下の4点が明らかとなった。第一に生活圏と移動手段については、狭い島内においても車・バイク中心の事例で行動範囲が広く、徒歩・送迎中心の事例で狭い傾向がみられた。第二に高齢期になっても、壮年期からの仕事を継続する事例があり、そのことが生活リズムと他者との接点を生み、生活を下支えしていた。第三に、町内会や民生委員等の役割が外出と人との関わりを維持する要因となっていた。第四に島内における行動範囲から住民同士の交流場所を見ると、港やJA、郵便局等の拠点で日常的な接触が生じ、互いの近況を把握しやすい関係が成立していた。

### 参考文献

- 1) 西尾市役所健康福祉長寿課、佐久島 要介護認定者の現状 R7.7月時点 2) 上田幸子 (2000) 高齢者のライフコースおよび幸福感に関する研究の動向、新見公立短期大学紀要 ,21,129-136 3) 宮本恭子 (2017) 島根県の離島における地域居住要件を考える日本プライマリ・ケア連合学会誌 40(1), 52-57, 4) 藤井容子・田中正道 (2018) 漁村集落における屋外の構成と滞留の場に関する事例研究 -瀬戸内海の離島集落における屋外環境整備に関する研究その1 - 日本建築学会計画系論文集 ,83,752,1897-1907

### 5-2 壮年期の支え

高齢期の仕事は全て壮年期から継続していた（表3）。継続により日々の生活リズムや他者との接点がつくられており、壮年期までに築いた仕事・役割・人間関係が、高齢期の生活を下支えになっていると考えられる。ただしfは民宿を現在中止しており、継続には体力的・運営上の負担が影響する場合がある。

表3 壮年期から継続している仕事（高齢期かつ就労者のみ抽出）

対象者	壮年期から継続している仕事	対象者	壮年期から継続している仕事
c	建築業	f	農業・民宿（現在中止）
d	農業・漁業・民宿	g	飲食店
e	農業・漁業・民宿		

### 5-3 高齢期の役割

高齢期（c・d・e）は町内会や民生委員等、地域運営に関わる役割を担っていた（表4）。会合や活動への参加が定期的に発生し、外出や人との関わりが維持されるため、住民の結びつきを支えるとともに、地域への愛着や自己有用感に繋がっていると考えられる。

表4 地域での役割

対象者	役割	対象者	役割
a(壮年期)	さくちく会運営	c(高齢期)	民生委員、町内会副会長、学校評議委員
b(壮年期)	消防団、スポーツクラブ会長	d(高齢期)	町内会長、島を美しくつくる会会長
		e(高齢期)	島を美しくつくる会、学生指導

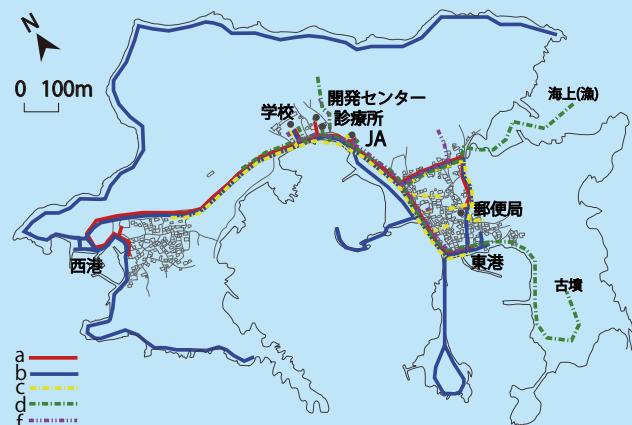


図3 行動範囲